

# 研修報告(1) マレーシアからの研修生

9月18日(日)から10月13日(木)、ぱれっとインターナショナル・ジャパンの研修事業として、Pauline Ak Dungat(以下:ポーリン)さんを受け入れました。ポーリンさんはマレーシアのシブにある「デイセンター・ムヒバ」で働くスタッフで、今後組織の要としての働きを期待される2児の母です。今回の研修では、ぱれっとの各現場研修に加え、ぱれっとバザーへの参加、他団体の見学及び研修を行ないました。また土日を中心に、日本人サポートグループ「ムヒバの会」メンバーのご協力をいただきました。様々な福祉の現場で多くを学んで欲しいと、盛り沢山の研修内容となりました。今月号では、研修の前半部分、ぱれっとの各セクションと、徳島研修(10/25-27)の様子について、同行スタッフ並びに現場スタッフよりご報告いたします。

9月25日(日)~27日(火)、左右木同行の元、徳島県へ研修に行ってきました。今回の受け入れ先だった(社福)愛育会の地域生活総合支援センター(以下センター)では、障害者の相談支援、<sup>グループホーム</sup>GH(13戸)・<sup>ケアホーム</sup>CH(1戸)の運営、就労・地域生活・地域活動の支援を行っており、今回は、就労支援と地域生活支援を中心に見てきました。

徳島空港に到着すると「Welcome」と書かれたプラカードで嬉しい出迎えがあり、センター到着後はウェルカムパーティーの料理作りを一緒にさせて頂きました。障害のあるメンバーが主体となって料理や会場の装飾の準備を進めていて、私達もメンバーに教えられながら巻き寿司や手打ちうどん作りを楽しく体験しました。



【料理作りの様子】

## ●地域生活支援

センターではGH・CHの他、一人暮らしや、結婚し夫婦で暮らしている方の支援もしており、人数は150人近くにもなります。私達も、GHや障害のあるご夫婦の自宅に宿泊をさせて頂き、生活の様子を見てき

ました。ご夫婦での生活では、地域の夕食宅配サービスを定期的にご利用する等の工夫がされていました。また、GHに暮らしている方達の中にも、一人暮らしに向けて様々な練習をしている方が多くいました。

## ●就労支援

障害者の就労現場をいくつか見学してきました。中でも、総社員数19名中10名が障害のある従業員のマルワ環境(株)では、社長の丸山さんの「この仕事は彼にしかできない。彼はわが社には欠かせない存在なのです」と、自信たっぷりに従業員のことを話す様子が印象的でした。また、他の会社で、読み書きや人との会話が難しい従業員がおり、その会社の社員曰く、「雇う前は、就業は無理だろう、と思っていたが、今では一番良く働いてくれる」と話していました。ポーリンさんは「彼は会話でのコミュニケーションが難しいため、障害が重度で働けないと見られてしまうが、本当はとても理解力がある。ムヒバでも似たケースがある」と話していました。

徳島では、本人主体の支援を模索し彼ら一人ひとりが想いを叶えるために彼らの可能性を信じ、一緒に考え、悩み、取り組んでいるセンター職員や企業の方達の様子が伺えました。「どうやったらできるのか、彼らも支援者もチャレンジし続ける毎日です」とセンターの方がお話ししていたのが印象に残りました。

たまり場ぱれっと 左右木 歩

## 各セッション研修の様子・ポーリンさんの感想

おかし屋では、クッキーの製造や企業販売へ参加しました。販路開拓について色々話をしました。ポーリンさんの施設では、さをり織りで作ったバッグやシャツを販売するのに大変苦勞しているとのこと。施設見学者や日本人がインターンで来た時に売れるぐらいで、マーケットをどのように開拓していくか課題だそうです。日本の作業所でも、製品を作るのはたやすいが売るのにどこも苦勞していることを話しました。最終日は通所員と1時間ほどミーティングをし、利用者の様子や給料のことを話しました。利用者には毎月給料は払えず、年2回のスペシャルデイにデパートへショッピングに出かけ、一人3000円のお小遣いで好きなものを買うのが楽しみだそうです。(相馬)

レストランでは、厨房でスリランカ人コックとの作業や、大畑さんとの弁当販売、佐藤さんとの清掃など業務全般を体験して頂きました。さすが二人のお子さんを育てているお母さんだけあって、包丁さばきなども安心して見ていられました。また、持ち前の積極性を発揮し、大畑さん、佐藤さんと、言葉は通じにくいものの、身振り手振りでコミュニケーションをはかっていました。午後には私と一緒にオーガニックのスーパーへ仕入に出かけ、途中で渋谷のハチ公と原宿にちょっと寄り道。人の多さと建物の高さで圧倒されていた様子でした。夕方にはぱれっとの理念について意見交換。NPOにとって、ミッションの共有がいかに大切かという点について議論しました。(南山)

ホームでは、1泊研修をしました。夕食にはマレーシア風唐揚げ(日本流に言うところ「鶏肉とキャベツとタマネギの炒め煮」)を作ってくれました。鶏肉を丸ごと1羽買ってきて、それを豪快にぶつ切りにしていく姿は、とても頼もしいものがありました。食後は、ホームにあるマイクカラオケで利用者が楽しむ様子を見たり、利用者数名がポーリンさんの似顔絵を描いてプレゼントしたりして、交流しました。翌朝は、皆が出勤するまでの様子を見てもらいました。マレーシアにはまだグループホームはないけれど、その必要性を感じたと話していました。(姫崎)



【利用者の描いた似顔絵を持って】

ポーリンさんは、一昨年に日本を訪問しています。大阪で一カ月間「さをり織り」の研修を受けるためでした。そして今回は、日本の障害者福祉の現状を視察し、そこから何を学びとれるのか、現在、自分が関わっているムヒバセンター(デイケアセンター)に何を還元できるのか、これまで暮らしてきた環境とは全く異なる東京という都会で、戸惑いながらもポーリンさんの3週間の挑戦は続きました。

私は、通訳のために他団体の訪問時に必ず同行しましたが、ポーリンさんの積極的な姿勢はどの団体からも好感を持って受け入れられました。言葉の壁は否めませんが、障害児・者の現場での作業や生活訓練の様子を見学することで、ポーリンさんの中で具体的なイメージがわき、ムヒバセンターのメンバーと重なる部分もあったのではないかと思います。スタッフ一同、帰国前の研修報告会を楽しみにしているところです。(谷口)